

日本独文学会

2006年秋季研究発表会

研究発表要旨

2006年10月14日(土)・10月15日(日)

第1日 午前9時50分より

第2日 午前10時より

会場 九州産業大学

第1日 10月14日(土)

開会の挨拶 (9:50~9:55)

A会場

西日本支部長 深堀 建二郎
会長 松浦 純

シンポジウム I (10:00~13:00)

A会場...06

ハイネと Vormärz の詩人たち —世代を超えた交流をめぐって—

Heine und Dichter im Vormärz

司会:高池 久隆/高木 文夫

- | | |
|----------------------------------|-------|
| 1) ハイネとファルンハーゲン夫妻 | 高池 久隆 |
| 2) ベルネからハイネへ ふたつのシャイロック論をめぐって | 中川 一成 |
| 3) ハイネと「戦友」(Waffenbruder) インマーマン | 平川 要 |
| 4) ハイネとビューヒナー | 兼田 博 |
| 5) ヴェールトとハイネ | 高木 文夫 |

口頭発表:文学(10:00~12:00)

C会場...10

司会:竹岡 健一/塚 雅志

- | | |
|--|-------|
| 1) ヘルマン・ブロッホ『ウェルギリウスの死』における共感覚の問題 | 早川 文人 |
| 2) 旅行記述の身体性 エリアス・カネッティ『マラケシュの声』における異国体験の形式について | 小林 将輝 |
| 3) ムージルの新しい人間 とシュペングラの「人間」概念批判 | 横道 誠 |
| 4) 不自然な死とは何か? 死をめぐりエリアス・カネッティの思想 | 須藤 温子 |

口頭発表:文学、文化・社会(10:00~12:00)

D会場...13

司会:竹内 宏/富重 純子

- | | |
|---|-------|
| 1) アドルノ批評におけるゲオルゲとワーグナー | 伊藤 壮 |
| 2) 『芸術 宗教』をめぐるディスクール分析 ヘーゲルの『精神現象学』における「芸術 宗教」という概念 | 馬場 浩平 |
| 3) ドイツ後期中世の『死の舞踏』における「死」と女性の対話をめぐって | 有泉 泰男 |
| 4) Die Entstehung der deutschen Japanologie vor dem Hintergrund des deutschen Kolonialismus | 辻 朋季 |

教育部会臨時総会 (13:10-14:10)

B会場

~~学会員への説明会 (13:10-14:10)~~

C会場

(予定されていたドイツ学術交流会・ゲーテ・インスティトゥートによる説明会は、両機関の申し出により中止となりました。)

— 休憩(13:00~14:30)—

シンポジウム II (14:30~17:30)

A会場...16

グリム・メルヒェン研究 —その多様なアプローチ—
Erforschung der Grimmschen Märchen
—Verschiedene Zugänge—

司会:杉浦 實

- | | |
|-------------------|-------|
| 1) モティーフ研究の観点から | 大野 寿子 |
| 2) 日欧類話の比較研究の観点から | 竹原 威滋 |
| 3) ジェンダー社会学の観点から | 野口 芳子 |
| 4) 心理学的解釈の観点から | 梅内 幸信 |

シンポジウム III (14:30~17:30)

B会場...20

歴史的に見た現代ドイツ語

Das heutige Deutsch — historisch gesehen

司会: 福本 義憲

- | | |
|----------------------------------|-------|
| 1) 歴史的に見た未来形 werden+不定詞 | 嶋崎 啓 |
| 2) 名詞の複数形と生産性 | 重藤 実 |
| 3) ドイツ語名詞的文体の発展 名詞的 である程度
の測定 | 井出 万秀 |
| 4) ドイツ語はどれ位人為的な言語か | 荻野 蔵平 |

口頭発表: 文学 (14:30~16:30)

C会場...24

司会: 恒吉 法海 / 嶋田 洋一郎

- | | |
|---|--------|
| 1) 疾風怒濤のヒロイン ゲーテ、レンツ、シラーの場合 | 今村 武 |
| 2) ヘルダーリン研究におけるベンヤミンの意義の見直しについて | 小野寺 賢一 |
| 3) 神話と哲学 「新しい神話」の公教性と秘教性 | 田中 均 |
| 4) 《審判》の草稿を中心としたカフカの創作過程に関する考察 「恥辱」からはじまる訴訟 | 須藤 勲 |

口頭発表: 語学、ドイツ語教育 (14:30~16:00)

D会場...27

司会: 田畑 義之 / 鈴木 敦典

- | | |
|---|--------|
| 1) 認容の標識としての gut | 宮下 博幸 |
| 2) 地名から見る言語接触について 古英語 wīc と古ノルド語 vík を中心に | 坂本 健一郎 |
| 3) キューバのドイツ語教育 ハバナ大学外国語学部ドイツ語学科のカリキュラム | 栗山 次郎 |

ポスター発表 (13:30~16:30)

E会場...29

- | | |
|---------------------------------|-------|
| * 話し言葉における dadurch, dass に関する考察 | 山崎 雄介 |
|---------------------------------|-------|

* ワイマール共和国期のジャズ 音楽雑誌に見るその変遷

池田 晋也

懇親会(19:00~21:00)

会場:ビアダイニング「じゃんくう」

(ソラリアステージビル 5F; 市内中心部にある天神バスセンター・

西鉄福岡駅と同じビル 092-726-8888)

会費:6000円(大学院生1000円)

第2日 10月15日(日)

シンポジウムIV(10:00~13:00)

A会場...31

ドイツ近代文学における<否定性>の契機とその働き

Das Moment der >Negativität< und seine Funktionen in der deutschen modernen Literatur

司会:浅井 健二郎

- 1) 二項対立と否定性 ヘルダーリンにおけるポエジー言語の成立構造 田野 武夫
- 2) メールヒェンの >Fort<- bilden Naturpoesie 論争におけるヴィルヘルム・グリムの立場について 田口 武史
- 3) メールヒェンのパロディー 「ハインリヒ・ハイネのローレライ」 小黒 康正
- 4) 『ある手紙』から『塔』へ ホーフマンスタールにおける否定性の契機とその展開 安徳 万貴子
- 5) 言語の否定性のなかからポエジー言語が立ち上がる時 ムージルの処女作『生徒テルレスの惑乱』 浅井 健二郎

口頭発表:文学(10:00~11:30)

C会場...35

司会:貫橋 宣夫/島村 賢一

- 1) 表現主義のヴァリエテ批評における劇的なものの再定義 西岡 あかね

- | | |
|--|-------|
| 2) ファレンティンとブレヒト 幕間劇『仔象』におけるファレンティン作劇術の影響 | 摂津 隆信 |
| 3) プラハとダブリン 20世紀の文学革命をうんだ二都市の政治・社会・文化的背景 | 河中 正彦 |

口頭発表：語学（10:00～11:30）

D会場...37

司会：A. カスヤン／森澤 万里子

- | | |
|---------------------------------------|-------|
| 1) 機能動詞構造を通して見たドイツ語の構文類型について 日本語と比較して | 湯淺 英男 |
| 2) アスペクトとモダリティ：動詞の活用を解く | 田中 愼 |
| 3) ドイツ語研究の一構想 文形成の規則体系から使用実態の分析へ | 在間 進 |

ポスター発表（10:00～13:00）

E会場...40

- | | |
|--|-------|
| * 「ドイツ語教員養成・再研修講座」の活動報告と紹介
ドイツ語教員養成・再研修講座実行委員会実行委員長 | 吉島 茂 |
| * 外国語学習用オーサリングシステム「Web Drill」について | 田畑 義之 |

閉会の挨拶（13:00）

A会場...41

高辻 知義

第 1 日 10 月 14 日 (土)

シンポジウム I (10:00~13:00)

A会場

ハイネと Vormärz の詩人たち ―世代を超えた交流をめぐって― Heine und Dichter im Vormärz

司会: 高池 久隆 / 高木 文夫

本年没後 150 年を迎えた詩人ハインリヒ・ハイネに関する研究は、信頼に足る全集の完成、多数の研究書の出版などによって飛躍的な進展を示しており、それにともなって、「ロマン主義」と「写実主義」の間、あるいは「ドイツ」と「フランス」の間に橋を架け、時代を超越する大詩人としての評価は益々堅固なものとなっている。しかし、「マイナー作家たちの群れの中で屹立する特別な存在ハイネ」というイメージが強調されすぎること、ハイネ理解にとって決して好ましいことではない。

本シンポジウムを企画した私たちの基本的立場は、ハイネが何よりも Vormärz 期(1815-48)に同時代の多数の詩人たちとの交流の中で活動した詩人であり、同時代の様々な詩人たちとの相互作用が「ハイネ」形成の重要な要素であることを重視することにある。勿論、これまでの多数のハイネ研究においても、ハイネと Vormärz 期の同時代人たちとの関係についての言及はしばしばなされているが、ともすればハイネの発言に寄りかかりすぎ、また他の詩人たちとの交流をハイネにとっての単なるエピソードのごとく見なし、時にはハイネを高く評価するために他の詩人をことさらに低く評価するといった傾向すら散見される。これに対して私たちは、ハイネと他の詩人の関係を見る場合、可能な限り「公平な」扱いを心がけ、一方的な影響関係にとどまらず、相互の影響関係にこそ注目したいと考える。以上のような作業を通じて、これまでのハイネ像がある程度相対化され、ハイネの否定的側面がこれまで以上に顕在化することも予想されるが、Vormärz 期に生きるハイネが同時代人たちと共通の問題をめぐって格闘するさまに目を向けることは、ハイネの「実像」に近づくために不可欠の過程である。

同時代人との交流について考察する際に候補となる詩人は多数いるが、私たちは特に「世代」という点に注目し、ハイネより年長のファル

ンハーゲン夫妻およびベルネ、ほぼ同年代のインマーマン、そしてハイネより年少のビューヒナーならびにヴェールトとの交流を取り上げることにした。このことによって、ハイネと詩人たちとの多様な交流を明らかにし、Vormärz 期において顕著に見られる問題群への詩人たちの取り組みの諸相に光を当てるのが本シンポジウムの目的である。

なお、今回取り上げるハイネ以外の詩人のうちビューヒナーを除けば、日本においてさほど知名度の高くない詩人たちであるので、本シンポジウムは結果的に、これらのいわゆるマイナーな詩人を紹介するという意味をも併せ持つことになるであろう。

1) ハイネとファルンハーゲン夫妻

高池 久隆

ハイネはファルンハーゲン夫妻と 1821 年以來接触を続け、1833 年にラーエルが死亡した後も、カール・アウグストとの間でほぼ生涯を通じた交流を保ってきた。両者の交流は、ラーエルが主宰する「サロン」などでの直接的出会いだけではなく、数多くの書簡によって支えられている。これらを観察すれば、共通の関心事をめぐる頻繁な意見の交換がなされ、それを通じて相互の立場を確立してゆく様が明瞭に見てとれる。ハイネとラーエルが同じくユダヤ人であったため、ユダヤ人問題がある程度の比重を占めることは当然であるが、夫妻とハイネの関係を全体として把握するならば、キーワードとして「ゲーテ」、「若いドイツ」、「サン・シモン主義」を挙げるができるだろう。

これまでの研究では、「サロン」の客としてのハイネが詳しく取り扱われている一方、カール・アウグスト自身はさほど問題とならず、ハイネ書簡の受け手、また証言者として名指されるという状況である。

本発表では、ファルンハーゲン夫妻のうち特にカール・アウグストとハイネの間に見られる相互的な関わりにより多くの光をあてつつ、ハイネと夫妻がともに、思想、文学観、歴史観の形成に関して相互に重大な影響を及ぼし合っていたこと、またカール・アウグストが決してハイネの単なる証言者にとどまる存在ではなかったことを明らかにしたい。

2) ベルネからハイネへ ふたつのシャイロック論をめぐって

中川 一成

本発表では、ハイネの *Shakespeares Mädchen und Frauen* の『ヴェニス

の商人』を論じた箇所(Jessika ならびに Portia)とベルネのエッセー *Der Jude Shylock im Kaufmann von Venedig* の読解の試みを中心に、二人の作家が、市民時代における「シャイロック」として、ドイツの政治的啓蒙の問題とユダヤ人の市民的同化の問題に対してどのような立場をとっていたかを考察する。

啓蒙以後のユダヤ人知識人のありかたを「シャイロック」をキーワードに論じたのはハンス・マイヤーであった(Hans Mayer: *Außenseiter*)。市民的特性である教養と財産を獲得したユダヤ人がなおも市民社会のアウトサイダーであり続けた事実は、啓蒙の理想の実現可能性に懐疑の影を投げかけたのである。

過激な共和主義者に変貌したベルネと生の美的肯定者ハイネを対立的に描き出す従来のハイネ研究に見られる図式は、*Ludwig Börne. Eine Denkschrift* におけるハイネの言説に全面的に依拠しているのみならず、ハイネとベルネに共通する「シャイロック」的経験を等閑に付す傾向がある。しかし排外的ナショナリズムに変質していくドイツ的啓蒙に対する「シャイロック」的視点からの異議申立という観点から二人の作家を読み直せば、世代的に先行するベルネがハイネを先取りする論点を提示していたことが分かる。

3)ハイネと「戦友」(Waffenbruder) インマーマン

平川 要

同世代のハイネとインマーマンは、ゲーテやロマン主義の圧倒的な影響下で少年時代を過ごした。ここから両者に共通した時代意識が生じてくる。すなわちロマン主義の影響からの脱却と、新たな写実主義文学の模索である。

二人の関係は、1822年インマーマンによるハイネの詩の批評から始まり、「古いドイツ」の「不正」や「愚行」に対する共同戦線へと進んだ。その闘いはプラーテンとの論争に端的に見られるが、1830年を境に交流は途絶えがちになる。この過程で、かれらは互いに相手の作品を事細かに追い、それぞれの立場から作品を批評し合っている。はたしてかれらは互いに相手をどのように理解していたのであろうか。

これまで二人の関係については、両極端な論調がしばしば見られる。一方では、ビーダーマイヤーのインマーマン像の下で同盟は誤解に基づいていたとされる。他方では、インマーマンをハイネと同等な社会批評家と位置づけ真の同盟関係を謳っている。

本発表では、二人の交友関係を全般的に再検討し、新たな時代に即した詩人として成長していく過程においてこの同盟関係が各々の発展に及ぼした影響を解明していきたい。

4) ハイネとビューヒナー

兼田 博

政治的状況は個々人のまさに個人としての生き方を規定せざるをえない。抑圧的な社会状況において、個人はどのように自己実現すればいいのだろうか。本発表では、「芸術時代の終焉」を意識したうえで活動した二人が Vormärz という時代にどのように個人の問題を扱ったかを見たい。

最大多数の利益を考慮した理念の中で語られる人間というのは、ある意味で抽象化された人間存在にすぎない。人間はそれぞれにちがった存在であり、わけても標準からはみ出した存在は光の当たりにくい場所にいる。

ハイネは異国の大都会に生きるコスモポリタンの詩人として、社会批判を通じて個人としての自己を実現した。抑圧体制を批判的に描くことによって先駆的にそれを乗り越えることができた。彼の精神はもはや被抑圧的状況にあえぐ人間のそれではない。そればかりでなく、彼は知識人として最先端を自負し、傑出した精神の貴族性にこだわった。

いっぽうでビューヒナーは底辺階層への共感を作品に織りこむことで、問題を先取りした。ハイネとは逆にビューヒナーが取り上げたのは個人を確立できない人々である。ハイネが理念型として人間を描いてみせたのとはちがい、ビューヒナーはドラマの主人公として具体的な文学的形象を創造した。それだけに問題が先鋭的に迫真性をもって迫ってくる。

5) ヴェールトとハイネ

高木 文夫

ヴェールト(1822~56)にとってハイネは生涯にわたりドイツ文学において最も大きな存在であり、ごく初期から 1848 年革命の敗北を機に擱筆するまでの、多いとは言えない彼の作品でハイネの影響を受けていないものはごく僅かしかない。ヴェールトの創作時期は 1) 1843 年までのドイツ時代、2) 1843 年のイングランド時代から 1848 年革命が起こるまで、そして 3) 1848 年の革命期、即ち『新ライン新聞』文芸欄編集者

をしていた期間、の三つに分けることができるが、本発表ではヴェールトの韻文に対するハイネの影響について、この各段階を追って検証し、特に最後の段階である、『新ライン新聞』に自ら掲載した詩を材料に、具体的にハイネとの関わりについて分析する。

分析の主対象は、1848年10月発行停止処分の解除を受けて発行を再開した『新ライン新聞』掲載の長編の諷刺詩「敵に噛みつくことほど愉快なことはない *Kein schöner Ding ist auf der Welt, als seine Feinde zu beißen*」である。諷刺の直接の対象は発行停止処分を逃れたライバル紙『ケルン新聞』の社主や編集人たちである。この詩や同時期の作品はヴェールトの文学活動の到達点と見なすことができ、ここにおける諷刺の手段としてハイネの作品からのもじりなどが多く使われているが、その使い方からはヴェールトの作品におけるハイネの意味を窺うことができる。

口頭発表：文学(10:00～12:00)

C会場

司会：竹岡 健一／堺 雅志

1) ヘルマン・ブロッホ『ウェルギリウスの死』における共感覚の問題 早川 文人

放送劇用の短編から出発し、長編小説として完成したヘルマン・ブロッホ(Hermann Broch, 1886-1951)の『ウェルギリウスの死』(Der Tod des Vergil, 1945)は、叙述方法に、つまり三人称内の独白や統語法、隠喩作法にその特徴が認められる。『ウェルギリウスの死』の先行研究において比喩、象徴の分析は注目されていたが、それらの多くは、語、表現に関する個別的な分析であり、従来の隠喩法分析の枠組みに留まるものであった。本発表は、昨今欧米圏で議論されている感覚の越境、交流を意味する共感覚(Synästhesie)というアスペクトから小説の解釈に取り組む。このアスペクトを消失させることなくテキスト分析にあたるのが課題となるのであるが、例えば、『ウェルギリウスの死』の冒頭の19行に及ぶ一文においてすでに、統語的運びにともなった時間の経過とともに、視覚、聴覚、嗅覚における感受の推移が流れるように展開し、ひとつの認識のモデルが形成されていることにその問題圏が現れている。

現在、共感覚の議論は、学際的性格を孕み、錯綜の呈を示している状態にある。したがって『ウェルギリウスの死』の分析を出発点に、言語芸術研究における共感覚論の有効性の射程を測るとともに、共感覚という知覚モデルの再考を促すことが本発表の意図するところである。

2) 旅行記述の身体性

エリアス・カネッティ『マラケシュの声』における異国体験の形式について
小林 将輝

伝統的な旅行記の形式は、旅行者のまなざしに基づいた、「客観的」な記述を目指すものが多かったが、戦後の旅行文学では、これが多様化し、新しい形式の旅行記が見られるようになる。この点から見ると、エリアス・カネッティの『マラケシュの声』(68年)は、旅行者のまなざしによる異文化解釈をベースに、異国の事物が絵画のように固定化される傾向が見られる一方で、音や匂いといった、他の認識手段に基づいた体験が提示されたり、さらには、旅行者が眺める対象との距離感を失って、それと同一化するような場面も提示される興味深いテキストである。また、記述の面では、首尾一貫した語り口がある一方で、推測や仮定の表現など、いわばあいまいな表現が導入される箇所もあり、これは、まなざしの客観性に基づいた記述形式の動揺という問題を指摘できるものと思われる。

旅行文学研究は、P.J.ブレンナーの旅行文学研究史によって90年代初頭より活性化し、本書もまた、新たな視点で取り上げられるようになる。例えば、アンネ・フックスは、言語論から派生したマス・ツーリズム論及び、サイードの西欧中心主義ディスクール批判をベースに、旅行者のまなざしの認識過程について優れた分析を行っている。しかし、認識論に還元されえないまなざしの問題や、文体上の特徴について、あるいは旅行者の身体性という点についてなど、掘り下げるべき問題があり、本発表ではこの部分を補強することを目指している。

3) ムージルの 新しい人間 とシュペングラーの「人間」概念批判 横道 誠

第一次世界大戦を経て、ムージルの 人間 への理解は独自性を強める。この時期の繰り返しの主張によれば、(1)人間は自分以外の人間

にも人間以上のものにもなりえないが、しかし人間はさながら「ゼリーのように」幅広い伸縮性をもつ、(2)このことは身体感覚のうえでも知覚されるが、その知覚体験は人間の「モラル」の変容可能性を予感させるものとして理解すべきである、というのである。

ムージルが終生の文学的課題を 新しい人間 の探求においていたことはよく知られているが、本発表では戦間期以降のムージルのこの課題への取り組みが、以上の人間観に基づいていたことを重視する。また、上述の認識が形成された時期は、ムージルが繰り返しシュペングラー批判を試みた時期でもある。ムージルはまさにその人間観を、シュペングラーのおこなった「人間」および「人類」概念の否定と思想的に格闘することで形成しえたのだということを指摘したい。

そのうえで本発表は独自に、ムージルとシュペングラーがそれぞれの人間観および 新しい人間 に関する思想を共通の知的土壌から萌芽させたことに眼を向ける。具体的には、両者が青年期に共通して受容したエルンスト・マッハの一元論を主題化する。

ムージルが学位論文の対象にマッハ思想を選んだのは周知のことだが、シュペングラーもその思想的出発点にマッハ思想を 他の一元論者の思想とともに 据えていたことは、シュペングラー研究、マッハ研究、ムージル研究いずれにおいても詳しく論じられてこなかった。

本発表は、ムージルとシュペングラーがひとしく青年期にマッハ思想を受容しつつ、それを互いに異なった人間観の論拠へと組みこんだことについて説明する。

4) 不自然な死とは何か？ 一死をめぐるエリアス・カネッティの思想

須藤 温子

「生き残る瞬間は権力の瞬間である」とするエリアス・カネッティは、主著『群衆と権力』(1960)において権力構造の根幹である死を機軸に権力論を展開し、権力と死の共犯関係を指摘する。一方、断想集においては死自体に対する極めてラディカルな ——死そのものの否認にまで至る—— 思想を展開してきたといえる。カネッティによれば、不自然であった死が文明の発展とともに生の一部を構成するものとして自然化・無害化されてきたという。そして、そのような死の位置づけとそれを後押しする宗教、哲学、心理学にみられる思考形式に彼は異議を唱える。

では、カネッティは不自然な死をどのようなものとして想定するのか。また、不

自然な死との関係において、死者をどのように理解しうるのか。カネッティは自らを「死の敵対者」と称するが、彼のこうした視座は一体どこに身を置くものなのか。

これまでカネッティにおける死という問題は、W. ヘーデケ、G. シュティーク、U. ルッペルをはじめ、権力と死との共犯関係を克服するであろう「変身」や「(文学的)不死性」との関連で論じられてきた。しかしながら、権力との関係にある死が前景化されるあまり、カネッティの死のとらえ方や死に対する敵対的企て自体は、十分検討されてきたとはいえない。

そこで、本発表では、カネッティにおける死の問題を、権力との関係にある死の問題と死自体の問題とに分けて検討する。そのうえで、カネッティの死に対する独自の態度表明を主に『群衆と権力』と断想集から具体的に抽出し、以上に挙げた諸問題を明らかにする。

口頭発表：文学、文化・社会（10:00～12:00）

D会場

司会：竹内 宏／富重 純子

1) アドルノ批評におけるゲオルゲとワーグナー 美的アナーキズムの失調 伊藤 壯

ナチス・ドイツのイデオロギー的先導者であったとされたことから、大戦後には半ば意図的に忘却されてきたシュテファン・ゲオルゲという存在について、近年になり再検討の機運も兆してきている。とはいえ、戦後のゲオルゲ研究においては、その閑却の由縁となったこの政治的難問が存在しないかのように振る舞うか、せいぜい彼に反ユダヤまたは国粹主義的傾向は無縁だったとの反証を述べる態度が大勢を占めている。このような看過と糊塗を脱するために必要なのは批判・批評的な視点に他ならない。ここで必然的にアドルノのゲオルゲ論を改めて検討することが求められるのだが、それにより戦後ゲオルゲ研究が積み残してきたものがいわば陰画として写し出される。ともあれアドルノは、ゲオルゲに対し一貫してその形式主義の反動性や党派性、秘教主義などを苛烈に批判する一方で、秘めた愛着もまた隠しきれないのだが、その撞着の構図が放恣なほどの相似的対応を示す彼のワーグナー論は最も重要な補助線となる。19世紀末の種々の革命運動に密かに共感しつつもことごと

く乗り遅れてしまったゲオルゲと、バクーニンと協調しつつ 1848 年の蜂起に参加したのみならず芸術作家の主体性も否認する過激な美学論をも書き残していたワーグナーのことをアドルノはいずれも一種の「挫折した革命家」と看做すのだが、それに留まらず、19 世紀末のアナーキズム美学が彼らにおいて強く共鳴していることは見逃しえないし、そこにアドルノ美学の要諦と限界も表れる。

2) 『芸術—宗教』をめぐるディスクール分析 ヘーゲルの『精神現象学』における「芸術 - 宗教」という概念 馬場 浩平

今回の発表では、G.W.F.ヘーゲルがその著『精神現象学』(1807 年)において「芸術 - 宗教」(Kunst - Religion)をいかにして定義しているかを示したい。

これまでの研究史において「芸術 - 宗教」は、啓蒙主義時代における文学と宗教の関連性(Wolfgang Schmitt, 1958)、また当時のクロプシュトゥックやヘルダーによる北方神話受容から促されたドイツのアイデンティティ再生(Wolf-Daniel Hartwich, 2000)をめぐる問題をもとに顕著に論じられた。エルンスト・ミュラーによれば、「近代の世俗化」の問題は、啓蒙主義時代の「宗教の審美化」と密接に関連している(Ernst Müller, 2001)。

しかし、その多くの研究が、文学や美学との関連性をもとにした「宗教」概念の位置付けのみに限定しており、どのようにして 18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけてのドイツ語圏における視覚文化が「不可視の崇拝対象を表象すること」へと促進されたか、という問題に関してはいまだに多く論じてはいない。今回、ヘーゲルの『精神現象学』における「芸術 - 宗教」という概念をその当時の「芸術 - 宗教」をめぐるディスクールと比較検討しながら、この問題への考察を深めていきたい。

3) ドイツ後期中世の『死の舞踏』における「死」と女性の対話をめぐって 有泉 泰男

15 世紀半ばよりドイツ各地の教会墓地の周壁には骸骨の形をした「死」が各階層、また各年齢層の人々を、男女を問わずに、舞踏(Tanz または Reigen)へと誘う壁画を描くことが流行った。さらにこうした図像は活版本としても印刷された。

こうした「死の舞踏」の壁画や活版本では「死」が聖界・俗界の人々をヒエラルヒ - に従って死に通じる舞踏へと誘う図像だけでなく、「死」と人々の対話がそれぞれ4行詩（或いは8行詩）のテキストで添えられている。予期せず訪れる死に直面した人々の驚きとともに、死を運命として懲憑と受け入れる或いは死に延命を乞うもの、それまでの生活に対する悔悟と神に助力を願うもの、現世での生活の楽しみを描くもの、さらに「死」に対して昂然と反抗し、舞踏を拒否するものなど、テキストの内容は様々である。それに応じて図像でも人間は「死」に悄然と引きずられていく姿、背を向けて逃げようとする姿、目をそむけた姿、ものに掴まり舞踏を拒否する姿なども様々に描かれている。

「死の舞踏」についての研究書・論文は数多くあるが、最近のものでは Helmut Rosenfeld: *Der mittelalterliche Totentanz*, Gerd Kaiser (Hrsg.): *Der tanzende Tod*, Erwin Koller: *Totentanz* などが挙げられる。そこで問題とされているのは各地で描かれた（或いは出版された）「死の舞踏」の相互関係や添えられているテキストの解釈である。

発表では15・16世紀に描かれた10余りの「死の舞踏」の壁画・活版本挿画とそれに添えられたテキストをもとに、「死」によって舞踏に誘われる女性の対応を、図像とテキストの両面から分析し、その結果をもとに、(1)「死の舞踏」の地域的特色、(2)「死の舞踏」の時代的特色、(3)「死」が女性を舞踏へと誘う理由、それに対する女性の対応から後期中世の女性像および女性観を考察する。

Brigitte Schulze: *Die deutschsprachigen spätmittelalterlichen Totentänze* では「死」と各階層の人々の対話を分析しているが、男性を中心としたもので、女性については僅かに触れているのみである。こうした状況から、上に述べた(3)が本発表の主眼点となる。

4) Die Entstehung der deutschen Japanologie vor dem Hintergrund des deutschen Kolonialismus

Tomoki Tsuji

Der Vortrag behandelt die Entstehungsgeschichte der deutschen Japanologie. Sie wird jedoch nicht als Geschichte der Japanologen bzw. als Fachgeschichte der jeweiligen Universität, sondern als Teil der modernen Wissenschaftsgeschichte unter dem Einfluss des deutschen Kolonialismus betrachtet.

In der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts wurde in Leipzig und in Berlin Japanforschung auf unterschiedlicher Weise betrieben. Dies spiegelt in sehr unterschiedlichen Versuchen das erwachende Bedürfnis nach einer Organisierung neuer Wissensgebiete. Wie können aktuell gewordene Kenntnisse über die Fremden, die weder der klassischen Philologie, noch dem europäischen Kulturkreis angehören, in das deutsche Bildungssystem als Forschungsobjekte integriert werden? Dies soll am Beispiel der entstehenden Japanologie erörtert werden.

In der Hochzeit des deutschen Kolonialismus bleiben solche Forschungsgebiete von den virulenten kolonialen und imperialen Diskursen natürlich nicht verschont. Unter dem Schock der militärischen Auseinandersetzungen in deutschen Kolonien Afrikas am Anfang des 20. Jahrhunderts entsteht eine gründliche Reform der deutschen Kolonialpolitik. Bernhard Dernburg gehört zu den entscheidenden Befürwortern einer neu zu entwickelnden „Kolonialwissenschaft“, die umfassende Kenntnisse über die deutschen Kolonien für kolonialpolitische Strategien vermitteln soll. Unter seiner Federführung wird 1908 das „Hamburgische Kolonialinstitut“ gegründet, das 1914 die erste „Professur für Sprache und Kultur Japans“ erhält. Die Geschichte des „Hamburgischen Kolonialinstituts“ zeigt, wie komplex die Organisierung dieser Wissensgebiete verlaufen ist, und wie – so meine These – die Verwissenschaftlichung der Kolonien auf Lehre und Forschung, auch der Japanologie eingewirkt hat.

シンポジウム II (14:30~17:30)

A会場

グリム・メルヒェン研究 — その多様なアプローチ —
Erforschung der Grimmschen Märchen
—Verschiedene Zugänge—

司会: 杉浦 實

グリム・メルヒェンは、1887年(明治20)年集成社刊の菅了法訳『西洋古事神仙叢話』をはじめとして、多くの人によりつぎつぎと翻訳紹介

され、今日にいたるまで広く読まれ続けてきた。とくに、グリムの手書き原稿（エーレンベルク稿）初版、再版、および決定版（第7版）それぞれに完訳が出版されていることは、ほかの児童文学作品や一般の文学作品の場合には考えられないことであり、傑出した受容のされ方だといつてよい。

一方、日本におけるグリム・メルヒェン研究の歴史をふりかえってみると、1913（大正2）年の蘆谷重常による語りの構造についての研究「グリム童話の特徴」を皮切りに、成立史研究、文体研究、モチーフ研究、深層心理学的研究、構造主義的研究、民俗学的研究、昔話としての国際比較研究、ジェンダー社会学的研究など、じつに多様な側面からの研究がなされてきた。

『子どもと家庭のメルヒェン集』はヴィルヘルム・グリムの改筆により、語りの文学から読む文学に変容していったという事情があるとはいえ、文献から採録された話を除き、大半はもともと民間伝承のおはなしであった。そこには語り伝えてきた民衆の生活習慣、願望、意識、自然観、宗教観などが反映されている。したがって、たんなる読み物ではなく、様々な観点からの考察が可能であり、また作品の理解を深めるためにもそれが必要でもある。

本シンポジウムにおいては、「いばら姫」（KHM50）を共通の考察対象として、報告者にそれぞれ異なる観点からこの作品を分析・考察し、問題提起をしていただく。「いばら姫」には、有名な類話としてシャルル・ペローの「眠りの森の美女」とかジャンバティスタ・バジーレの「太陽と月とターリア」などがあり、その起源は古く、神話的・伝説的要素を具え、モチーフも多様である。

大野寿子氏にはモチーフ研究の立場から、竹原威滋氏には日欧類話の比較研究の立場から、野口芳子氏にはジェンダー社会学的立場から、梅内幸信氏には心理学的立場からと、4人の報告者それぞれ異なる立場から論じていただく。そのうえで、会場からも積極的な発言を求め、グリム・メルヒェン研究の今後の発展と深化をはかりたい。

1) モチーフ研究の観点から

大野 寿子

1) 研究対象の説明：KHM50「いばら姫」は、ペローの「眠りの森の美女」やバジーレの「太陽と月とターリア」と同様、アールネ/トンブソン/ウーターの話型分類（ATU）第410番「眠り姫話型群」に属す

るメルヒェンであり、主人公の永きに渡る「魔法の眠り」が、「一時的な死」とも見なしうる重要なモチーフとなっている。

2) 先行研究の成果との関係：この「魔法の眠り」は、『エッダ』におけるブリュンヒルトの「眠り」の場面、700年の間「眠れる七人」の伝説ともジャンルを越えて共通する「不思議な眠り」と考えられる。「不思議な眠り」とは、従来の時間概念からのいわゆる逸脱であり、各地の伝説に頻出する「時間の喪失」モチーフと密接に関わることをハインツ・レレケは指摘する。すなわち、日常空間から隔離された状態にあった主人公が帰郷すると、実際には数百年の月日が経過していたという話との関わりである（『ドイツ伝説集』第59番「ハイリングの小人」等）。このようにジャンルを越えて存在する「時間の喪失」と「不思議な眠り」には、植生によって外部から遮断された空間が不可欠となっている。グリム兄弟における「魔法の眠り」と「時間の喪失」とは何かを、植物や自然に囲まれた空間（森など）を積極的に結びつけ考察する。

3) テーゼ： 伝承文学のジャンルを越えて存在する「魔法の眠り」と「時間の喪失」には、閉鎖された森のような場が不可欠である。

2) 日欧類話の比較研究の観点から

竹原 威滋

1) 研究対象の説明：メルヒェンが書物として編纂される時には、当時の音声による伝承とそれを文字化する編者の意図のせめぎ合いがあったはずである。グリム・メルヒェンの編纂に、どのような時代精神と編者の意図が込められていたのかを明らかにするため、ヨーロッパにおける「いばら姫」と「白雪姫」の伝承資料を「眠り姫」話形群として考察し、そのモチーフ構成を国際比較し、次結果を得た。グリム・メルヒェンでは眠りから覚めて王子と結婚してハッピーエンドで終わるのに対して、グリム以外の民間伝承では王不倫型、王子秘密婚型、王子重婚型など、実に多彩な話がある。グリム兄弟は、そのような伝承の中から用意周到に取捨選択して、当時の倫理観にふさわしい近代メルヒェンの「定番」を形成したといえる。

2) 先行研究の成果との関係：従来のグリム・メルヒェン研究はゲルマニスティックの枠組みの中で行われてきたきらいがある。グリム・メルヒェンを広く日欧の民間伝承の世界の中において考察してみると、今まで見えなかった新しい知見が得られる。ヨーロッパの民間

伝承の世界ではむしろ、「眠りから覚めて幸せ結婚にいたるプロット」よりも、「男女の抜き差しならぬ三角関係がいかにして解決に向かうかというプロット」に語りの面白さを見いだしていた。

3) テーゼ：ハッピーエンドで終わるグリム・メルヒェンは近代市民社会の倫理観によってフィルターに掛けられた「近代メルヘン」である。

3) ジェンダー社会学の観点から

野口 芳子

1) 研究対象の説明：グリム・メルヒェン「いばら姫」を中心に他の話も取り上げながら、ジェンダー社会学の視点からの解釈を試みる。その際、とくに悪人といわれる魔女や継母について、ジェンダーの視点から再検討を加えていく。子どもや家族に対して権限をもつ父親や王が、子捨てや子殺しの責任を問われるのではなく、女性が、とりわけ老婆が悪人とされるのはなぜなのか。賢女が魔女として悪の烙印を押されてしまういばら姫の話は、その理由を探る格好の題材といえる。さらに、数字に関するイメージについても考察し、思い込みを切り崩す作業を試みる。まず、姫が眠り込んだ年齢に関する誤解（15歳ではなく14歳）を解く。次に、13や7に刷りこまれたマイナスイメージを検証し、そのイメージが絶対的なものではなく、時代によって変更可能なものであることを立証していく。

2) 先行研究の成果との関係：ボティックハイマーやタートルなどアメリカの学者を中心とするこれまでのジェンダー学的解釈は、性別による視点にのみに終始している。受動的な女性が男性に選ばれるという教訓や女性の善悪を年齢で評価する姿勢などを問題視する。この発表ではジェンダーの視点を性別に限定するのではなく、数字や動物のイメージなどあらゆる思い込みを崩すジェンダー社会学の視点にまで敷衍していきたい。

3) テーゼ：ジェンダー社会学的視点とは、男女のことだけでなく、あらゆる思い込みを崩す学問的アプローチである。

4) 心理学的解釈の観点から

梅内 幸信

1) 研究対象の説明：1940年に田中梅吉によって開始された日本のグリム・メルヒェン研究は、最近ようやくその個別作品研究も盛んにな

ってきたが、そのメルヒェン解釈は、主として臨床心理学者によって行われている。「いばら姫」の場合、フロイト学派のように、「螺旋階段」を性的経験、「鍵を鍵穴にさしこんでまわすこと」を性的交わりと解釈するとき、また、ユング学派のように、姫と王子の結婚を、アニマとアニムスの性を巡る戦いによる自己実現と解釈するとき、いずれもそこからテキストの非日常性の背後に隠れた多義的な人間の心像が浮上してくる。それは、「メルヒェンの深層に隠された民族の知恵」であり、これは現代でも十分に意義深い。

2) 先行研究の成果との関係： 典型的なグリム・メルヒェンに見られる勧善懲悪の精神を、A.ヨレスは「素朴な道徳」と呼び、K.ランケは「メルヒェンの機能」として把握している。この関連においてM.リュウティは、メルヒェンの主たる作用を「一種の精神療法的作用」と呼ぶ。精神分析によるメルヒェン解釈を考慮に入れるとき、そこにおける最大の関心事は、芸術作品の深層であると同時に、その成立過程である。この深層は、ちょうどジグソー・パズルのように、解釈学的循環に基づいて文節化されうる。

3) テーゼ： 心理学的分析方法のメルヒェン解釈への応用は、メルヒェンに潜む民族の知恵を抽出しようとするとき、かなり有効である。

シンポジウム III (14:30~17:30)

B会場

歴史的に見た現代ドイツ語

Das heutige Deutsch — historisch gesehen

司会：福本 義憲

言語学は、構造主義言語学の登場以降、共時的研究と通時的研究とに二分され、ドイツ言語学においても、現代ドイツ語研究がドイツ語史研究とは別個に行なわれる時代が長らく続いた。しかし、近年の言語研究では、類型論、認知言語学、生成文法、文法化理論などの分野において顕著に見られるように、両者間で活発な学問的交流が認められる。それは、例えば、心態詞研究の歴史的アプローチへのシフトや Elisabeth Leiss などに見られる文法カテゴリーに関する類型論的・歴史的研究に見て取れる。本シンポジウムの目的は、そのような言語学の動向を踏まえ、最

新の語史研究の知見を取り入れることにより現代ドイツ語の包括的な分析の可能性を提示することにある。

今回のシンポジウムでは、そのような観点から、4名の論者が発表を行なう。まず、動詞領域では、嶋崎が< werden+不定詞 >に見られる「推量」の意味の成立を論じ、現代ドイツ語の werden の多義性を歴史的に分析する。次に、名詞領域では、まず重藤が名詞の複数形の生産性の問題を< -sタイプ >の複数形を取り上げて歴史的に概観する。さらに、井出が現代ドイツ語の特徴の一つとも言われる「名詞的文体」を取り上げ、中世以降のテキストに即しながら「名詞的文体」の特徴について検討する。最後の発表者の荻野は、標準ドイツ語がどのようにして技巧性と人為性を含む言語として成立したかを社会史的な視点も取り入れながら論じていく。

ところで、今回のシンポジウムは、内容が形態論・統語論・語彙論と多岐にわたり、また、そのアプローチの仕方も主として「言語内的な」タイプから「社会言語的な」視点を取り入れたタイプまで多様であるので、各発表の内容的な関連付けにも充分注意をはらいながら、論点が拡散することがないように留意したい。例えば、討論では、歴史的に見た場合、現代ドイツ文法において文法カテゴリー（たとえばアスペクト）がどのような機能を果たしているのかといった問題、あるいは、語彙体系の歴史的成り立ちといった包括的な問題についても言及することによって、全体として「歴史的に探る現代ドイツ語」といったアプローチが有効であることを提示していきたい。

1) 歴史的に見た未来形 werden + 不定詞

嶋崎 啓

ドイツ語の未来形< werden + 不定詞 >はもともと開始相というアスペクトを表す形式であったと言われるが、「開始相」という用語を用いることは間違いではないが、やや正確さを欠く。開始相はある事態が「始まる」ということを意味するが、< werden + 不定詞 >はある事態が「生じる」ということを意味するのであって、その出来事の開始や終結や過程などの区別を特に表すものではなかった。不定詞の動詞が完了相であれ非完了相であれ、werden が現在形であればこれからある事態が生じる、過去形であれば生じたことを意味した。従って、< werden の現在形 + 不定詞 >と、初期新高ドイツ語期まで頻出する< werden の過去形 + 不定詞 >とのあいだにも根本的な意味の違いはなかった。しかし、実際にある

事態がすでに生じたことと、これから生じることのあいだには表される事態の現実性という点で大きな違いがある。ある事態を表す場合にそれがこれから生じるものとして表示することは語用論的推論によって話法的な意味を付加する効力を持ったと考えられる。この話法的意味が推量の意味や、2人称主語の際に見られる要求の意味のもとになった。以上のような考察を通じて、現代ドイツ語における未来や推量や要求といった < werden + 不定詞 > が持つ多義性を説明し、またそれぞれの意味をより明確に規定することが可能になる。

2) 名詞の複数形と生産性

重藤 実

ドイツ語の名詞の複数形は、単純な規則で形成することができない。多くの文法書は複数形を5つのパターンに分類して説明しているが、その5つのパターンは、出現頻度も異なるし、生産性という観点からも、異なっている。特に問題だと思われるのは、ドイツ語名詞の複数形の中では、出現頻度が低いにもかかわらず < -s タイプ > が生産性を持っていることである。

最近の認知科学の発展にともない、「言語の理論的記述のために必要な文法規則は、実際に母語話者にはどのような形で記憶されているのか」という問題にも関心が高まっている。Sonnenstuhl-Henning(2003)は、生産性を持つタイプは規則として、生産性を持たないタイプは規則ではなく形態として母語話者に記憶されている、と主張し、それを実験で証明しようとした。

Sonnenstuhl-Henning(2003)は歴史的変化については言及していないが、この発表では < -s タイプ > の複数形の歴史を概観することにより、生産性を持つタイプが交代する現象を歴史的に跡づけ、言語における生産性という現象の理解を深めることを試みる。また「出現頻度が低いにもかかわらず生産性を持つ」という現象が、名詞の複数形だけでなく、動詞領域にも存在することを示し、「頻度」と「生産性」の関係を考察する。

3) ドイツ語名詞的文体の発展 「名詞的」である程度の測定

井出 万秀

新聞記事，学術論文など，公の場での現代ドイツ語書きことばの文体は名詞的になってきていることが指摘されている．例えば目的をあらわす場合，zu 不定詞句を用いて動詞的に表現する一方，前置詞句と動詞の名詞化による表現も可能である（um zu überprüfen = zur Überprüfung）．一方，述語においても機能動詞構造（zur Einsicht kommen vs. einsehen）や動詞名詞化 + （機能）動詞（Anerkennung finden vs. anerkannt werden）など，動詞名詞化を用いた表現が可能である．

名詞的文体と言われたとき，研究者によって述語における動詞の名詞化を想定するか，動詞の名詞化を用いた文相当の前置詞句を想定するか様々であろう．例えば、von Polenz の Deutsche Satzsemantik で名詞的文体（Nominalstil）について比較的詳細に論じられているが，その後「名詞的」文体についての議論は飛躍的には進展していないように思われる．直感的には「動詞的」，「名詞的」の判断はできても，その程度を厳密に測定する指標はないままである．

本発表では，まず現代ドイツ語の公の場での書きことばにおいて，文体が「名詞的」であると判断する基準の構築を試みる．そしてあくまでも作業仮説であるこの基準に基づき，通時的に，名詞的である度合いがどのように変遷しているか，ひとつの分析サンプルを提示し、名詞的文体の分析を可能にする作業ツールを提案する。

4) ドイツ語はどれ位人為的な言語か

荻野 蔵平

標準ドイツ語は、しばしば steif, umständlich, abstrakt, pedantisch, papieren, bürokratisch, akademisch と形容される言語である。その理由は、その特徴の多くが、自然な言語発達の結果というよりも、17 世紀後半以降の標準語化・規範化の過程の中で人為的に形成されたものであることによる。その意味で、ドイツ語は、英語やフランス語に比べて、確かに「人為的な言語」ということができる。

近年のドイツ語史研究は、今日 Hochdeutsch と呼ばれる言語には、万人のためのコミュニケーションの手段という役割の他に、標準語を必要とした 17 世紀後半以降のドイツ有産市民階級・教養市民階級の自己利害がかなり含まれていたことを明らかにした。例えば、この事実を詳細

に論じた Peter von Polenz (Deutsche Sprachgeschichte, 3 Bde.,1991(2000)-1999) によると、彼らは自己の特権的な社会的地位を獲得・確保するために、庶民の言葉とは異なる難解で技巧的な Bildungsdeutsch (教養ドイツ語) なるものを作り上げたという。

今回の発表では、Polenz 等の先行研究を踏まえ、現代ドイツ語がどれ程「人為的な言語」であるのかを「枠構造」、「冠飾句」、「造語に見られる Purismus」、「語彙構造の二重性」といった問題を取り上げ具体的に確認していく。

口頭発表:文学(14:30~16:30)

C会場

司会:恒吉 法海/嶋田 洋一郎

1) 疾風怒濤のヒロイン ゲーテ、レンツ、シラーの場合 今村 武

疾風怒濤を代表するゲーテの『ヴェルテル』、レンツの『家庭教師』と『軍人たち』、シラーの『たくらみと恋』のヒロインに焦点をあて、彼女らの境遇と、その行動を支える道德観を考察したい。シュトゥルム・ウント・ドラングの理論的指導者となったヘルダーがサミュエル・リチャードソンの小説を積極的に紹介している点に着目し、18世紀中葉から積極的に翻訳紹介されていたイギリス感傷小説の女性主人公像とその道德性、社会的行動規範と比較検討したい。

男性中心のグループ活動を基盤としたシュトゥルム・ウント・ドラングは、その作品群においても女性を主に男性の立場から描写していたはずである。文芸学においてもヒロインは、男性中心的視点から考察されてきた。この分野に新たな視点を導入し、疾風怒濤における女性像というテーマ研究確立の一助としたい。

本発表は、以下の諸点を提出することになる。1)リチャードソンの小説の女性主人公は、当時イギリスで勃興しつつあった市民階級の実利的な道德と行動規範を望ましい形で再現しており、ドイツのシュトゥルム・ウント・ドラングにも深く影響した。2)疾風怒濤のヒロインは、男性中心の社会(戯曲)構造の中に組み込まれており、3)男性登場人物の性的・支配的な欲求の対象となり、またかれらの社会的支配・上昇のための対象・手段となる。4)それゆえヒロインは自らの道德性を発

揮しなければならない状況に追い込まれると、それを（男性中心）社会において承認される形で発揮しなければならない。

2) ヘルダーリン研究におけるベンヤミンの意義の見直しについて

小野寺 賢一

本発表の目的は、ヴァルター・ベンヤミンのエッセイ「フリードリヒ・ヘルダーリンの二つの詩作品」詩人の勇氣«-»臆する心«」(1914-1915)がヘルダーリンの研究史においてもつ意義を再考することにある。考察の糸口は、昨年刊行されたヴィンフリート・メニングハウスの著作『生の半ば—ヘルダーリンの詩学についての試論—』(2005)である。彼はヘルダーリン研究を主に二つの潮流に分けたうえで、双方の読解法を取り入れながら、ヘルダーリンの詩作品「生の半ば」(1804)を解釈しようと試みる。その一方は、詩作品を読む際に表象されるものを重要視せず、語の響きの感性的受容を詩の本質とみなしたノルベルト・フォン・ヘリングラートの発想を受け継ぐ立場である。もう一方は、そうした感性的受容を成り立たせうる形式面での法則性よりも、主に詩作品の哲学的解釈に従事する立場である。従来ベンヤミンのヘルダーリン読解は、どちらかといえば後者の立場から言及されてきたが、比較的近年になって、そこにはヘリングラートの理論の影響がみられることも指摘されるようになった。こうしたことから、ベンヤミンはヘルダーリンの詩作品を、それがもつ形式的特性全般と意味内容とを相互に関連させることで解釈したと考える。その場合彼の解釈は、メニングハウスの試みの先行例とみなすことができるのである。本発表では以上の事柄について、ベンヤミンおよびメニングハウスそれぞれの解釈を具体的に検証しながら論じる。

3) 神話と哲学 「新しい神話」の公教性と秘教性 田中 均

本発表は、フリードリヒ・シュレーゲル(1772-1829)の1798年から1805年までの著作・講義における、古代ギリシア神話と「新しい神話」の関係を分析する。従来の研究では、「神話についての演説」(1800年)で展開された、近代における文学的創造の源泉としての「新しい神話」

という構想は、翌年のイエーナ・ロマン主義サークルの解体とともに挫折したとされ、その後カトリックに転向したシュレーゲルの過去志向的にしてドイツ中心主義的な思想との差異が強調されてきた。

シュレーゲルは 1798 年頃から、古代ギリシアの共同体が一枚岩ではなく、大衆の感性的原理と哲学者・聖職者の知性的原理の間で分裂していたことを示唆しており、「新しい神話」とは、古代において挫折した、知性的原理に基づく神話の創造を、近代において再び試みる構想といえる。彼が 1803 年から 1805 年の講義において、「新しい神話」が形成する美的な共同体が、「秘教的哲学」を独占する哲学者・聖職者と、詩的な「公教的哲学」である神話を与えられる大衆との階層秩序を伴うと論じるのも、この枠組みのなかで理解すべきである。たしかに「神話についての演説」で美的共同体の階層秩序は明示的には論じられないが、その理由は、このテキストが卓越した文学的・哲学的能力を備えた友人たちの私的な会話の一部という体裁をとることにある。公教性と秘教性の問題は既に 1800 年の「新しい神話」の理念に伏在しており、この点でシュレーゲルの思想には連続性があると考えられる。

4)《審判》の草稿を中心としたカフカの創作過程に関する考察

- 「恥辱」からはじまる訴訟 -

須藤 勲

フランツ・カフカの残したテキスト、特に『審判』について、それが草稿として残されたという点に注目し考察を試みる。

『審判』は、「恥辱だけが残るように思われた」という言葉で終わるとされるが、近年の研究では、処刑の場面である Ende と題された章は、『審判』のテキストの中では初期に、逮捕の章のすぐ後に書かれたことがわかっている。Ende の章は、『審判』の長い創作過程の中では終わりではなくむしろ始まりを意味していることになる。逮捕から処刑までをつなぐような長い訴訟は、「恥辱」という言葉に続いて書かれていったことになる。このような背景を踏まえたくて改めて『審判』を読み直すことで、「恥辱」という言葉の持つ意味について考えていく。

「恥辱」という言葉は、カフカ研究の初期のベンヤミンの解釈のように、カフカのテキスト理解の手がかりとなるキーワードとして扱われることが多い言葉であるが、『審判』を創作していたカフカにとってこの言葉は、さらに長い訴訟の過程を書こうという意図のもとに書かれたのである。そのような視点から見たとき、後に残るという「恥辱」とは、

その後には書き続けられた『審判』の各章自体とも重なるものとして考えられる。さらには何より体験としての「書くこと」を求めたカフカにとって、一度終わりを書いた『審判』を書き続けることは常に恥辱の感覚と共にあったのではないだろうか。

口頭発表：語学、ドイツ語教育（14:30～16:00）

D会場

司会：田畑 義之／鈴木 敦典

1) 認容の標識としての gut

宮下 博幸

ドイツ語の形容詞 gut の用例を観察すると、この形容詞が文頭や文中に現れ、それに関わる文全体が認容的に解釈される例が見られる。

- (1) Sie wurden leicht gerüttelt, Karin seufzte bedauernd. – Nein: sagte Achim überzeugt, im Ton einer Zensur setzte er hinzu: *Gut!. Karsch hatte es anders gemeint ...*, aber ein Seitenblick erreichte Achim nicht, er starrte voraus und nickte zuweilen (Uwe Jonson: Das dritte Buch über Achim)

この例で gut は「よい」という評価を表す形容詞として使われてはならず、後続する文に認容的な解釈を与える標識の働きをしていると考えられる。

先行研究ではこのような gut の用法のみに着目した研究はないようである。本発表の参考となるのは、関口の『独作文教程』(1991²⁰)であり、そこではこの種の用法が「純粹認容」として分類されているが、教程という性質上、上のような用法が詳細に分析されているわけではない。そこで本発表では、電子コーパスなどから収集したこの種の gut の用法を整理し、またこのような拡張の認知的背景に関して、他の類似の用法との関連で考察してみたい。また関口の分類のうちの他の認容表現と、ここで問題となる関口の言う「純粹認容」との関係についても考えてみたい。

さらに通時的な視点から見ると、このような拡大は gut に特有なものではなく、現代ドイツ語で認容を表す表現として定着している zwar にも、かつて同様に見られたようである。最後にこのような通時的な側面に関しても言及するつもりである。

2) 地名から見る言語接触について - 古英語 *wīc* と古ノルド語 *vík* を中心に -

坂本 健一郎

西ゲルマン語圏には、主に語尾に "wīc" を持つ地名(独 *Braunschweig*, 蘭 *Noorwijk*, 英 *Greenwich* 等)が数多くある。この語の表す意味は「住居(地), 村」で、ラテン語 *vīcus* からゲルマン語へと借用されたものと考えられているが、一方で、古ノルド語の *vík*「入り江」を起源とする説もある。

スカンディナヴィア人たちの影響が強かったイングランドにおいて古英語 *wīc* は「居留地, 居住, 酪農場, 貿易・産業地, 港湾」(Mitchell 1995)といった意味を持ち、他のゲルマン語より多様な意味を含んでいると考えられる。この意味の多様性についてブリテン島にある地名を対象に古英語と古ノルド語との言語接触の観点から論じる。

さらに、Bach(1981), Udolph(1994)の先行研究を踏まえ、一般名詞としての *wīc* の使用例を古ゲルマン諸語の文献で概観し、その表す意味と形態の両面からアプローチしていく。このようにして、地名がいくつかの要素から構成されることを検証し、音韻変化の点から古英語における古ノルド語の影響を考えることにする。

上で述べたように、古英語の地名においても古ノルド語との言語接触、それに伴う音韻および意味の融合があったとするのが本論の基本的立場である。

3) キューバのドイツ語教育 - ハバナ大学外国語学部ドイツ語学科の カリキュラム

栗山 次郎

外国のドイツ語教育の実情を日本のゲルマニストに報告する目的の一つは、日本におけるドイツ語教育を相対化して見るための材料提供である。従来は合衆国やEUにおける(先進的な)ドイツ語教育は少しずつ紹介されていたが、東アジア諸国でのドイツ語教育に関する報告は極めて少なかった。発表者は数年間にわたって西日本支部学会の発表会において中国、韓国、台湾におけるドイツ語教育の一端を紹介してきた。今回のキューバ、ハバナ大学外国語学部ドイツ語学科のカリキュラムの紹介により、日本での、また東アジアでのドイツ語教育を相対化することが可能である。

ハバナ大学外国語学部はキューバでの唯一の外国語学部である。それゆえに言語教育において独自の位置を占めている。入学希望者は他の学部にはない予備課程（準備課程）を一年間経なければならない。一学年は 20 人程度のクラスに分けられる。3 年生になると成績のいい学生はティーチング・アシスタントとして 1 年生を教える。ほとんどの学生は奨学金を受ける。4 年生になると実習がある。

学会での発表では具体的な単位数や授業の様子を報告する。また、今年 3 月ハバナで開催されたラテンアメリカ・ドイツ語教師連盟の学会の様子も簡単に述べる。

ポスター発表 (13:30~16:30)

E会場

* 話し言葉における < dadurch, dass > に関する考察

山崎 雄介

枠外配置を対象とした研究は数多く、枠外配置が発生しやすい文肢として前置詞句を指摘するものも少なくない。しかし、従属文や zu 不定句を伴う「da(r)-前置詞」に焦点を絞ったものは見当たらない。

本発表では、IdS の COSMAS や München 大学の BAS といったコーパスより収集した文例を手掛かりに、現代ドイツ語の話し言葉に現れる枠外配置現象のうち、従属文や zu 不定句を伴う「da(r)-前置詞」が枠外に出されるケースを扱う。調査対象とした「da(r)-前置詞」のうち特に dadurch のみが突出して高い枠外配置頻度を示した。この理由をコーパスより収集した様々な文例（たとえば、Das ist uns ebe zunichte geworden **dadurch**, daß mir meine Tante alles versprochen hatte und hat nix gehalten, gell? といい文例が収集されている）を実際に提示しながら検討したい。

比較的高い出現頻度を有するという調査結果から、話し言葉においては徐々に < dadurch, dass > が一体のものと意識されはじめていると推論することができる。このことは、dadurch がそれ以外の「da(r)-前置詞」と比べて意味が限定されやすい（「理由」「原因」）ことと無関係ではあるまい。

出現頻度の上昇を理由として、< dadurch, dass > は文法化の途上にあるとは言えまいか。当該の現象を文法化という観点から説明する可能性があるかどうかも考えたい。

* ワイマール共和国期のジャズ 音楽雑誌に見るその変遷

池田 晋也

この発表では 1920 年代のドイツにおけるジャズ表象の変遷を扱う。ジャズは第一次世界大戦末期のアメリカの参戦によってヨーロッパにもたらされた。ドイツでは戦後の経済復興とともに本格的な受容が始まったといわれている。初期のジャズが音楽の領域にとどまらず他の芸術ジャンルにも多大な影響を及ぼしたことは周知の事実である。文学においてもこの時期にはジャズに関連した作品が世界的に見られる。

アメリカと同じくヨーロッパにおいても、「ジャズ」は騒々しい 20 年代の代名詞であった。「ジャズ」という言葉を文化史的に考える場合、これが文明と野蛮という両極端なイメージを併せ持つものだったということを忘れてはならない。つまりジャズは、「自由で活力に満ち、ヨーロッパの文明に触れられていない根源性」と、「無限の技術的進歩の象徴としてのアメリカの大都市」の象徴であったのだ (H. Danuser)。

これまでの研究では、アフリカ・黒人とジャズといった前者に関するものは幾つか見られるものの、都市・機械文明といった後者の観点からの研究で決定的なものは未だ無いといえる。よって本発表では特に機械文明とジャズとの接点に注目し、当時のドイツ語圏の音楽雑誌 (Anbruch と Melos) を参照することによって従来のジャズ表象を捉え直すことを試みる。この試みによって、上記の相反するジャズイメージは初めから常に並存していたのではなく、機械文明、大都市のリズムといった側面は 20 年代末期に表面化してくる、ということを確認したい。

第2日 10月15日(日)

シンポジウム IV (10:00~13:00)

A会場

ドイツ近代文学における<否定性>の契機とその働き Das Moment der >Negativität< und seine Funktionen in der deutschen modernen Literatur

司会: 浅井 健二郎

<全体の説明>

ドイツ文学・思想において否定性 (Negativität) が最も自覚的に問題化されたのは、言語批判的な意識が先鋭化した前世紀転換期のことである(特に、ニーチェ、マウトナー、ホーフマンスタール、ムージル、カフカ、ベンヤミン etc. において)。そしてそれ以降のドイツ文学は——とりわけ表現形式に関して——この問題意識に主導されるものとなり、言語の否定性 (文学の表現媒質としての言語の原理的機能不全性) を強く自覚した否定性の文学へと変貌する。この問題意識はホーフマンスタールやムージルやカフカにおいては見やすいことであるが、Th.マンの自己イロニーにも、一種の弁証法的関係にある表現主義と新即物主義の双方にも妥当し、さらには第二次大戦後の文学においても、今日に至るまで受け継がれてきているように思われる。

だが、同時にこう問わねばならないだろう。十九世紀末までのドイツ文学は、上に述べたような意味での否定性の文学の質をもっていないのか、それとも、もってはいるが言語の否定性の現われ方が異なるのか？

ここで、「ロゴス」概念の二重性 (<理□言葉>あるいは<認識□表現>) に即して、言語の否定性に符合するものとして、認識の否定性 (人間のなす認識の原理的機能不全性) を考えるべきであろう。十九世紀末までのドイツ文学・思想において、前世紀転換期に言語の否定性として意識された問題は、ロゴスに関する問題の逆サイドから、認識の否定性として意識されたのではなかったか——カントの純粹理性批判も、シュトゥルム・ウント・ドラングおよびロマン主義の反啓蒙主義も、クライストのいわゆる「カント危機」および『マリオネット劇について』も、あるいはビューヒナーの『ダントンの死』におけるニヒリズムも。

2) メールヒェンの >Fort<- bilden Naturpoesie 論争における ヴィルヘルム・グリムの立場について 田口 武史

グリム兄弟と A. v. アルニムの Naturpoesie 論争において、ヴィルヘルム・グリムは、不特定多数の人々が作り出した Naturpoesie の存在と価値を認めつつも、その伝承には個人の創作衝動が欠かせないと主張した。この一見矛盾した見解には、『子供と家庭のメールヒェン集』編集の指針となった、彼独自の伝承文学観が表れている。

メールヒェンを後世に残すために、ヴィルヘルムは三つの<否定性>に挑んだ。第一に、口頭伝承の習慣が消えつつある時代が前提であった。声が伝達力を失うならば、文字を用いるほかない。しかし文字化はテキストを硬直させ、読者の創作衝動と伝承意欲を阻害しかねない。それゆえ第二に、文字の機能不全を乗り越えるため、文字から声が響いてくるような文体を作り出さねばならなかった。第三に、アルニムのように、伝承された話を「素材」として扱う創作態度では Naturpoesie を保持できないことを強調した。メールヒェンを生み出すのは詩才ではなく、メールヒェン自身が内蔵する「種子」、あるいは「核」である。伝承者が、受容した話を自らの言葉で語りなおすとき、この「種子」に生氣が吹き込まれ、新たなメールヒェンとなる。ヴィルヘルムはこのような伝承のあり方、すなわち >Fort<-bilden を自らのメールヒェン集で再現することで、三つの<否定性>を克服しようと試みたのである。

3) メールヒェンのパロディー 「ハインリヒ・ハイネのローレライ」 小黒 康正

ハインリヒ・ハイネの詩「ローレライ」は、ドイツ・ロマン派の文学的営為が凝縮する概念「メールヒェン」に依拠しながら、新しい「伝説」を捏造し、新しい「水の精」を案出する。ハイネは、ロマン派による論争と実践によって定着したメールヒェン概念を踏まえながらロマン派の文学的営為に浸り、同時にそれに醒めたまなざしを投げかける。この詩は、ライン川中流の巨岩をめぐる当時流布していた言説を巧みに利用しながら「民衆メールヒェン」を装い、同時に「創作メールヒェン」を志向することで、無名の人々による口承と特定の個人による書承という「メールヒェン」の二重性を体現する。眼目は詩の始めと終わりに置かれた「私」に対する「メールヒェン」の憑依、つまりローレライの美

5) 言語の否定性のなかからポエジー言語が立ち上がる時 ムー
ジルの処女作『生徒テルレスの惑乱』 浅井 健二郎

ムージルの処女作『生徒テルレスの惑乱』(1906年)の表現形式を決定しているのは、根本的には、さまざまに変奏される次の二つのモチーフである。

1) 言語の否定性: このモチーフは、まず、冒頭に置かれたメーテルランク『貧者の宝』からの引用文でもって明示される。ムージルの悟性言語は、必然的に、非悟性的な知覚内容を「語りえぬもの」としてもつことになる。この「語りえぬもの」を語ろうとする試みが、彼にとっての「ポエジー」である。

2) 認識の否定性: このモチーフは、「認識行為を担う悟性は、認識対象の「第一の顔/生」(合理的側面)しか捉ええず、本来認識されるべき「第二の顔/生」(非合理的側面)は把握されぬままである」という風に示される。上述の「語りえぬもの」とはこの「第二の顔/生」であり、その知覚は無意志的感性に委ねられている。

悟性言語は無意志的感性が直覚するものを、いかにしてその生命性を損なうことなく語りうるか—これが表現形式上の課題となる。この課題に『テルレス』はどう応えているのか。従来の解釈はこの問いに、„etwas“の多用と比喩表現への注視でもって答えてきた。だがそれ以外にも、巧妙な仕掛けが施されている。それらを通していま、言語の否定性のなかからポエジー言語が立ち上がろうとする。

口頭発表:文学(10:00~11:30) C会場

司会:貫橋 宣夫/島村 賢一

1. 表現主義のヴァリエテ批評における劇的なものの再定義

西岡 あかね

表現主義の劇場理論については既に多くの研究があるが、従来の研究は、表現主義の戯曲の上演・演出方式に考察の重点を置くことで、初期表現主義における文学キャバレー等の小劇場にはほとんど注意を払ってこなかった。また、同時代のアヴァンギャルドの劇場理論との関連に

ついていえば、表現主義の劇場と未来派やダダ等の実験的劇場との本質的な相違のみが強調されてきた。本発表では、この従来の研究視点を批判的に再検討し、初期表現主義の小劇場理論をアヴァンギャルドの劇場理論との関連において考察する。具体的には、表現主義作家のヴァリエテ批評において、この小劇場形式のいかなる上演様式や美学的側面が受容の中心となっているかを論じる。更に、そこで評価された要素が、初期表現主義の文学小劇場の体現する、前衛的芸術観とどのように関連しているかも明らかにする。更に、初期表現主義の文学小劇場とアヴァンギャルドの実験的劇場の実践形態を比較。後者の革新性の裏にある芸術批判的態度と、いまだ伝統的な朗読会の様相を呈する前者の「文学」という枠組みへのこだわりを対比することで、後期表現主義における、いわゆる劇場（Schauspielhaus）への回帰・集中を説明したい。

2. ファレンティンとブレヒト 幕間劇『仔象』におけるファレンティン作劇術の影響

撰津 隆信

ブレヒト作『男は男だ』中の茶番劇『仔象』は、「劇場ロビーで演じられる幕間劇」という副題からわかるように、これまで『男は男だ』の付属物と捉えられ、独立した作品として真剣に論じられることは少なかった。しかし、マーティン・エスリンやジョン・ウィレットといったイギリス人研究者はその独立した価値を認めており、また彼らの仕事を持ち出すまでもなく、ブレヒト研究の世界ではこの『仔象』がカール・ファレンティンの影響下にあることは有名である。本発表ではそのファレンティンの作品を実際に取り上げ、『仔象』に見られるその共通点および影響関係を考察する。

『仔象』からは「叙事的演劇」や「異化効果」といったブレヒト演劇理論の先取りの要素を発見することができる。たとえばその形態として、観客が発言することによる舞台上と観客との間の直接的なやりとり、一貫性を欠いた筋と「失敗」を義務付けられた終幕、そしてファレンティンが用いたものと同じ「笑いのネタ」等が挙げられる。この第三点の「ネタ」に関しては、多少の表現の差異はあるが、同じ小道具と「オチ」が用いられている。このようなことから、これまで過小評価されてきたファレンティン作品の価値を発見し、「青年期ブレヒトに影響を与えた」という肩書きに実質的内容を伴わせることが可能になり、さらにはそのような肩書きを越えて、ファレンティンその人へと視線を向けることが

可能となるのである。

3 . プラハとダブリン 20世紀の文学革命をうんだ二都市の政治・社会・文化的背景 河中 正彦

二十世紀文学の屋台骨を支えた作家の出生地は著しく局在化している。二つの都市プラハとダブリンで、西ヨーロッパの東端と西端に対称的に位置する「周縁」の二都市から、前世紀の文学革命は始まったのだ(テーゼ1)。プラハは、F.カフカ、R.M.リルケ、F.ヴェルフェルをはじめ、多くの優れたドイツ語作家を、片やダブリンはJ.ジョイスやW.B.イェーツ、B.ショウ、J.M.シング、S.ベケットなど、実におびただしい作家群を生み出している。これらの名を削除すれば、二十世紀文学の輝きは半減するだろう。この平行現象について、纏まった研究はまだない。

これら二都市の文学の背景として政治・社会的な共通項を括りだしてみると、二重帝国の属領という位置が決定的に重要である。つまりオーストリアとハンガリー、イングランドとスコットランドは対等の関係だったが、ボヘミアとアイルランドは、屈辱的な属領の位置に甘んじていた(テーゼ2)。ここから過激なナショナリズムの問題が発生する(テーゼ3)。プラハ出身の作家は、リルケなどを除けば、すべてユダヤ人であったし、ダブリン出身の作家たちは、ケルト人かケルト系であった。民族言語が消滅の危機に曝されるまでに差別され、遅ればせながら民族性を自覚し始めたこれらの作家たちにとって、自己の民族的アイデンティティを確立していく過程が、そのまま自己の文学を確立していく過程でもあった(テーゼ4)。

口頭発表: 語学 (10:00~11:30)

D会場

司会: A. カスヤン / 森澤 万里子

1 . 機能動詞構造を通して見たドイツ語の構文類型について 日本語と比較して 湯浅 英男

kommen, bringen などの機能動詞と、前置詞句ないしは対格目的語(共に動作名詞と関係)との組み合わせから成る機能動詞構造は、「拡張形」

とも呼ばれ、単一動詞の構文的拡張とも捉えられる。本発表ではそこで様態副詞の扱いに注目し、ドイツ語の構文類型を日本語と比較し、考察する。従来ドイツ語と日本語は類型論的に、それぞれ「する」的言語と「なる」的言語に分けられたり(池上 1981)、移動表現に関しても「衛星枠付け言語」と「動詞枠付け言語」に分けられたりした(Talmy 2000)。後者の区分では「様態・手段」表現の構文的な位置づけも異なる。それら類型論的研究に対し、ここでは以下の点に注目する。つまり、日本語の擬音語・擬態語(例えば、ドンドン、ニコニコなど)が典型的な副詞と見做され(仁田 2002)、他方で動詞化も可能であるのに対し(例えば、ドンドンする、ニコニコする)、ドイツ語の機能動詞構造においては、単一動詞の意味内容を表わす動作名詞には原則的に付加語的形容詞も付かず、ゼロ冠詞ないしは前置詞と融合した定冠詞しか来ない(Helbig 1979)。傾向としてドイツ語では、動作を修飾する副詞的要素が機能動詞構造から排除される。構文的に副詞的要素を動詞などの形で焦点化しやすい日本語と、しにくいドイツ語という類型論的差異を主張してみたい。

2. アスペクトとモダリティ：動詞の活用を解く

田中 慎

日本語とドイツ語の対照研究において、それぞれの動詞の活用が対照されることはほとんどない。ドイツ語における動詞活用は、人称、数、テンス、モダリティなどのカテゴリによつての変化の系列であり、日本語のそれとは一線を画すものと考えられている。日本語の動詞(用言)の活用は、それに続く要素との接続のための音声的な変化と捉えられているからである。

本研究発表では、日本語とドイツ語の対照研究の見地から、「それぞれの言語の動詞の活用の違いは一般に考えられているほど大きくないのではないのであろうか？」という問題提議を行いたい。ドイツ語の動詞の活用が人称とテンスを中心に「定性」を与えるものだとすると、日本語の用言の活用はアスペクトを中心とした「定性」の表示形式と捉えられるのではないかということである。

観察の出発点は、Abraham (1991)、Leiss (2000)などで提示された、多くの言語で観察されているアスペクトとモダリティの相関関係である。Leiss (2000)は、ドイツ語、英語などでの Modalverb の発達に際して、形態的なアスペクト表示の後退が深く関係しているというテーゼを提示し、言語普遍的に imperfektiv-indefinit-epistemisch および perfektiv-

definit-deontich という 2 つの相関性が観察されることを示した。本研究はこの対照言語学で得られた知見を日本語に応用する試みである。

本研究で主張するテーゼは、日本語の用言の活用（の一部）を「アスペクトの体系」と捉えることなど、多くの *Gedankenspiel* 的な側面があり、「まっとうな」アスペクト研究からは導かれない要素も含んでいる。しかしながら本研究は、このテーゼが各言語における動詞のカテゴリ（アスペクト、テンス、モダリティ）の対照により演繹的に予測されるという意味で、対照言語研究の一つの可能性を示すことを目指している。

Abraham, Werner (1991): Modalverben in der Germania. In: Iwasaki, E.:

(ed.): *Begegnung mit dem "Fremden". Grenzen – Traditionen – Vergleiche. Akten des VIII. Internationalen Germanisten-Kongresses in Tokyo 1990.* München 1991, vol. 4, 109-118.

Leiss, Elisabeth (2000): Verbalaspekt und die Herausbildung epistemischer Modalverben. in: *Germanistische Linguistik* 154, 63-83.

3) ドイツ語研究の一構想

文形成の規則体系から使用実態の分析へ

在間 進

「研究」の目的は、新たな知見を獲得すること、実用的な側面で社会的なニーズに応えることにある。「言語」の存在理由は人間のコミュニケーション手段として機能するところにある。言語の、コミュニケーション手段という実用的機能を重視することは、研究の一つの目的とした「実用的な側面で社会的なニーズに応える」という点につながる。

「ドイツ語研究」の目的は、言語の普遍性よりもドイツ語の個別性を重視し、「ドイツ語の母語話者がドイツ語文をどのように形成し、使用し、かつそれを知覚し、理解するのか」を分析することである。

このような問題設定の場合、分析対象は「本来的な意味」での言語使用（そして文法性ではなく、容認性）にまで広がる。それは同時に、言語使用の諸要因を「すべて」含む生データ（コーパス）を分析の基盤に据えることになる。そしてさらに、ある表現が使用されるか否かではなく、その表現がどのような頻度で使用されるかという「使用頻度」も重要な一部になる。

本発表では、このような観点から生じて来る問題提起と分析結果の一部を、以下の点に絞って述べる。

- 1．情報構造および添加成分の意味機能
- 2．文形成規則と実際の言語使用
- 3．結合性の頻度的傾向
- 4．表現様式の使用傾向

なお、「日本人がドイツ旅行をする際に使用するドイツ語」の調査・分析の枠組みについても示す予定である。

最後に、この目的設定は、ドイツ語研究に「客観的評価」を導入したいという想いに基づくことを述べる。

ポスター発表(10:00～13:00)

E会場

*** 「ドイツ語教員養成・再研修講座」の報告・紹介**

本セッションは通常の研究発表ではない。現在行われている標記講座の報告、紹介に加えて、会員諸氏のご意見を伺い、講座の改善および周知方を進めることを目的とするものである。

同種の講座は、東京ゲート・インスティテュートの講座として吉島他が1年半にわたって行った「ドイツ語教員養成講座」がある。これに関しては信州大学における秋季研究発表会で吉島が報告をしている。

大学における教育は、特別な「教員免許」なしに行われている。「学問の自由」がその根拠として挙げられることが多い。しかし、外国語教育は学問研究自体を遂行する所ではない。当然教育に関する基礎知識、基礎訓練を受けたものが担当すべきなのだが、現在までその方向にはほとんど進んでいない。現在第二外国語の必要性が云々される中で、特に教員養成は重要課題である。本講座はこの課題を解決する一助として企画されたが、その役割は、各大学においてドイツ語教員養成が本格的に行われ、発展的に解消するまでと考えている。

ポスターセッションでは、ドイツ語教員として考えられる必須の能力（(1)ドイツ語教育の基礎理論、(2)シラバス編成、授業計画・実践、(3)科学的なカリキュラム構築）を養成するために本講座で行ってきた、オンライン授業（Moodle使用）、E-Mailによるレポート、（発展コースでは、授業参観・実習も加わる）、それを基にしたワークショップの様子などをビデオ録画も使って紹介する。

* 外国語学習用オーサリングシステム「Web Drill」について

田畑 義之

大学における初習外国語教育の時間数不足を補うには、文法や語彙のドリルのように必ずしも教員を必要としない分野を PC を使った自習に委ねることが望ましい。本発表では、そのようなドリルを簡単に作成するために独自に開発したオーサリングシステム「Web Drill」を紹介する。

同種のオーサリングツールとしてはフリーウェアの Hot Potatoes があるが、問題作成のためのインターフェイスや問題ファイルの形式が、大量の問題作成には適していない。また、テキスト形式で問題が簡単に作成できる市販のオーサリングツールもあるが、高価であったり、誤答に対するフィードバック機能が弱いなど問題点も多い。そこで Hot Potatoes と同等以上の豊富なフィードバック機能を持ちながら、簡単に大量の問題が作成できるオーサリングツールを開発した。

本発表では (1)ポスターによる Web Drill の概要説明 (2)プロジェクターを使ってのデモンストレーション (3)ノート PC で参加者の皆さんに問題の作成を含めて本システムを実際に体験してもらう、を予定している。

本システムは現在授業で試用しながら改良中であるが、完成の暁には問題ファイルを含めて公開し、全国のドイツ語教員に使ってもらう予定である。将来的にはこのシステムを使われる先生方にも問題を提供していただいて問題を共有するシステム構築につなげていきたい。

閉会の挨拶 (13:00)

高辻 知義

A会場

